令和５年度第３回　静岡県立浜北西高等学校学校運営協議会　議事録

１　日時　令和５年 12 月 15 日（金）　午後２時から午後４時まで
２　場所　静岡県立浜北西高等学校　会議室
３　出席者（委員、敬称略）
　梅林欽哉（元小学校・中学校管理職）、中津川智美（常葉大学教授）、
　森下晃行（起業家、農業）、明保晴香（浜北国際交流協会理事）
学校関係者
　邑田聡一（校長）、戸田敬之（副校長）、伊藤正徳（教頭）、
　山田哲也（事務長）
　※ 生徒会生徒懇談会　嶋田佳世（生徒会担当）、生徒会生徒７名
４　議事
(1) 開会
(2) 校長挨拶
(3) 今年度の学校関係者評価について
(4) グローカル・ハイスクール進捗状況について
(5) 「総合的な探究の時間」の実践報告
(6) 協議
学校運営協議会委員からの意見は以下の通り。
・ 10 月 24 日（火）の常葉大学での本校生徒の発表について、大学生から辛辣な意見が多かった。理由は２つ。１つ目は大学生が考えていたものより内容が中途半端であったこと。２つ目は高校生から質問事項が送られてきたのは発表の２日前、大学生は２日間でいろいろ調べて答えを用意したが当日、高校生からそれに関する質問がほとんどなかったこと。
・ 発表の内容についてのアドバイスでなく、資料の誤字、言い回しなどの添削になってしまったものもあった。高校の教員のかかわり方に疑問も。
・ 高校生は昔と比べて質的に変化している。大人と一緒に何かできないかと考えている子もいる。悪い方の変化は目立つが、良い方の変化はわかりにくい。子どもたちは教科の学びだけでなく、こんなものになりたいという何かを求めている。
・ （今の高校生は大人に対して）もっと僕のことを知ってほしい、（大人と）関わりたいと思っている。
・ （10 月 24 日「探究の日」について）反転授業をやりたかった。外部講師がいきなり教室に入って生徒たちに教えるのではなく、ワンアクション、リハーサルが欲しい。ワンコミュニケーションが必要である。生徒が何を知りたいか聞きたい。事前と事後の（生徒との）コミュニケーション

がほしい。

- 浜北西高校の生徒は、何かきっかけがあれば伸びるのではないか。気づきがあれば。何かきっかけがあって、「あ、自分には数学が必要だ」と気付けば勉強をする、学びだすのではないか。
- （本日の学校の取り組みの説明を聞いて）浜北西高校は、他の高校に比べて一人ひとりの生徒の体験に寄り添うアクティビティを行っていると思う。
- 高校で教えることは学習指導要領に定められている。世間では進学実績でその高校を評価する。そのため、教員は最低限これだけの学力がを付けなければいけないとなる。今の高校生は、今後何を学んだらいいのかわからない子たちだから、いろんな経験を積ませて学ぶ意欲を喚起することが必要である。
- 生徒一人ひとりに思いがある。一人ひとりに対応することは、先生たちが大変。(生徒に対して)寄り添える生徒が出てくるとよい。

(7) 生徒会生徒との懇談

「なぜ生徒会長になりたいのか、なりたいと思ったきっかけは何か。成長マインドからか、それとも証明マインドからか」。「自分が卒業した高校と比べて自習室が少ないと感じる、どう思うか」。「インスタでの発信の様子は」。「生徒会生徒がこのような形で、大人と話すことはよくあるのか」「大学では学長と生徒のランチ会が定期的に催されているが、浜北西はどうか」などの質問が学校運営協議会委員の皆様からありました。

生徒からは「学校に自習できる場所がもっとほしい、図書館だけでは不十分」「生徒会では本音で気持ちをぶつけることができる」「人前で話すことに慣れた。体育大会では『縦割』に挑戦。成功した」「体育大会でみんなが決めたルールを守ってくれたことがうれしかった、いい学校だと思った」「インスタは行事ごとにあげるようにしている」「人の役に立ちたくて生徒会に入った」「せっかくの『縦割』が、体育大会だけで終わってしまってもったいない」などの意見が出ました。

委員の中から、このような話し合いはとても有意義であるという声がありました。

(9) 閉会